

tab

No.
17
2009 / 07 / 15

後藤美和子 / 木村和史 / 野村龍
石川和広 / 長尾高弘 / 福島敦子
水島英己 / 山岸満 / 倉田良成

糖 = *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

- 後藤美和子：船出／01
石川和広：ふたつの歌／03
野村龍：数式／05
長尾高弘：支え／06
水島英己：老農夫／08
福島敦子：羽／10
倉田良成：あひ見での——私の小倉百首から／11

文

- 木村和史：ブルーベリー／13
山岸満：アートに出会う／15
倉田良成：悪人正機説について(3)／17

あとがき集／20

画：和田彰

tab 第17号／2009年7月15日(毎奇数月発行)

編集発行人／倉田良成

〒230-0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ 201

Eメール／kateis11@k3.dion.ne.jp



後藤美和子

船出

彼らが難破することを私は知っていた

砂地に打ち揚げられるその姿を

繰り返し見てきたのだから

私も行きたい、私も行きたい

けれど私は置いていかれる

遠ざかるその船を見送りながら

叫びもしない

感情のバトンが短すぎることに

私の両手を中央から滑らせれば

まもなくストーンと抜け落ちてしまう

私は何度でも置いていかれる

私は行進に添い

砂地を歩き

けれど決定的にその船に乗れず

私はあのような白い横顔を持たず

ただ食料を持ち

飲み水を持ち

よい船を見つけたと言っていた

よい飾りを施せたと微笑んでいた

船底の軋みにも

厚すぎる帆にも頓着しなかった

「さあ、船出だ」と船頭は永遠の声で叫んだ
砂地のむくろはいっししか乾き
さらさらと軽く飛んでいく

(皆既蝕四十八)

石川和広

ふたつの歌

私たちは笑いながら歌いながら

さみしいのかもしれないね

船の中で部屋の中で店の中で

うすぐらく、ほっとしながら

息もつけない夢を

みている、のかもしれないな

夜、口笛をふくのが好きだった

夜、口笛をふくのは不吉なことだといわれたけど

でも夜、明かりのついた本屋へ行く時なんか

口笛をふいた 大学を出た頃かな

「雨に唄えば」とか「第三の男」とか

そういうのが好きだった

緊張感がない歌なのにワクワクしていたよ

はた迷惑なことだ

雨の中で傘を手に踊り歌うのが「雨に唄えば」

四つの国の手で引き裂かれたウィーンで

追っ手から地下道を渡って逃げる「第三の男」

自転車に乗りながら

必死にその歌を吹きながら逃げたんだ どこからかここからか

ふたつの歌が風景の中で

自分の肉体と奇妙に合成する つくりものの

生ものの私

そういうとき歌だつて歌つた 暗やみでドキドキして
スピードと過ぎ去る人と木々と景色と
それは生きている世界、恐れている世界
その向こうを夢見て走る

その向こうってなんだろう
その向こう側に飛び込んだ気は何もしない
ただあの時とは別の場所にいるように思う

別の場所で口笛を吹いてみることもできる
でもほとんど吹かない
はるかに夜は物騒になったように思うし
たまたま吹かない気もするし

そうしなくても町の毎日の変化がわかるし
口笛とはちがう変え方がしたい気がしているし

野村龍

数式

肝臓が

飛行船のように漂いながら

ゆっくりとこちらへ巡って来る

こなごなに砕かれた水仙の香りと

こなごなに砕かれた獣の香りとが

この谷間のこんな奥にまで

しずかに降り注ぎ おだやかに立ち籠める

雲が 葡萄色になる時

鶉のふっくらした羽音は

光の右腕から 豊かに祝福を受ける

やがて 聖杯までが

翼を波打たせ

時折ほほ笑みを零しながら旋回し始める

〈言葉は

いつも君の側にある〉と

燃えながら歌い続ける 御使いの輪

母が

すべての泥をぬぐう

支え

音楽に初めて触れたのは、

まだ少年の頃、

姉の恋人に交響曲のレコードを

聞かせてもらったときだった。

渴いて干からびた心に、

音楽はたつぷりと潤いを与えてくれた。

せっかく集めたレコードを捨てた母のことは

心の底から憎んだ。

人が生きていくためには、

食べることもより大切なことがある。

そんなこともわからない俗物め！

大人になってから、

バイオリンを習いに行き、

素人オーケストラに入った。

そのまま音楽の道に入りたいと思ったが、

家族の反対に屈して勤め人になった。

結婚して子どもが生まれた頃までは、

それでもバイオリンを弾くこともあったが、

やがてふつりとやめた。

接点はレコードだけになったが、

音楽は心の渴きを癒してくれた。

音楽は心の中の宝物であり、

そのようなよりどころを持たない人間を

哀れんだ。自分はそういう人間とは違う。

そんな調子でさらに三十年が過ぎた。

妻に先立たれ、一人暮らしになった。
侘びしい生活の中で、
音楽を聴き続けた。

本人はすぐに帰ってくるつもりだったらしい。
しかし、ベッドに寝かされているうちに歩けなくなり、
認知症も見つかって、

一人暮らしに戻すわけにはいかない、
と医師に宣告され、

老人介護施設に移った。

もう二度と家には帰らないだろう。

音楽から引き離されて、

聴きたいと言いつ出すかと思いきや、

そんな気配はどうもない。

楽しみは食べること。

周囲に居丈高に接するのは、

自分は他人とは違う

という思いの名残なのだろう。

その思いが心の支えなのか。

水島英己

老農夫

和牛に匹敵する味から

和牛に等しい味へと

豚の肉質は上昇した

その夜

豚たちと一緒に寝て

お茶を飲んだ

(養豚業者としてはもう思い残すことはなにもない……)

堤の上を散歩する人よ

馬鈴薯を植えているわたしを見よ

石蒨が邪魔なのだ

吹き荒れる春嵐 一人と豚が

交尾する

短夜を泣き尽くして豚になる

生涯に

垣根が立てられ

鶯も郭公も小さくそこで鳴く

耳を澄まして

言語を聞け

老農夫として

馬鈴薯を植えているわたしを見よ

石蒨が邪魔なのだ

感傷の涙を流さない鼻はすばらしい

この手は蹄のように

激しく土を掘り

幾筋もの畝を作る

この一生涯を養豚で終わらせないものたち

それを俺は憎む

福島敦子

羽

おおおおおおうううううをうおん
ををおおうををわわわわわああんんん
うおおおおんん

突堤に行つて帰つてくる

ひゅゅゅゅゅゅゅううん
ううううううううううう

風が吹いていたらしい

んんんがんんんんんんんんんがああ

繭みたいに丸まって

ソファの下で寝たり起きたり永遠
はてのひらのなか

人は必ず死ぬってことは もう忘れてしまった
(みんな忘れて暮らしているよ)

おおおおおおいおいをををんんんうん
わあんんんわあんんん
ううううううううううう

いつか背中に羽が生える日まで

あひ見ての

はじめて女のもとにまかりて、又のあしたにつかはしける

あひ見ての後の心にくらぶればむかしは物をおもはざりけり

藤原敦忠

はじめてあのひとに会ったのは、友だちのうちで開かれたパーティの席だった。アルコールとたべものを持ち寄り、歌や、ギターや、果ては詩の朗読まで飛び出した夜のにぎわいの中心にはあのひとはいた。いちばん若くてなまいきで、そして綺麗な男だった。わたしはこれと目をつけたものは外したことがない。服でも声望でも恋人でも。けれどあのひとは、これまでどんな男でも難なく落としたわたしの手管をつくしても、すぐさま恋人の関係になることを拒んだ。手紙を交わし、誓約のような儀式を踏んでからわたしのものになった。あのひとはわたしが思っていたとおり、おくてでうぶだった。けれどそうなってしまうからはたちまちにして、苦痛にも似た深い悦びをわたしに与えるようになった。わたしはうろたえた。これではほしいままに生きるはずだったわたしの望みとはうらはらに、奴隷の人生を送らなければならぬ。あまつさえ、あのひとがわたしから失われたり、わたしのことはさても、あのひとがこの地上から失われたりすることを思うだけで、わたしは恐怖に取り憑かれた。わたしは自由にならなければならぬ。それからわざと友だちのところに外泊した。友だちは女友だちではなかった。朝、帰ってみるとあのひとは何もとがめずに紅茶を淹れてくれた。ポットを持つ左手のくすりゆびに絆創膏をしている。ギターの調弦のときに傷めたのだという。別の夜、仕事先の付き合いがあつて宴

会に出たら、むかし関係のあった男と再会した。わたしはじぶんが自由であることを確かめたかった。ホテルのシャワーの匂いをさせて遅く帰ると、あのひとは左臂を包帯で吊っている。こころの底から驚き心配してどうしたのかと聞いたなら、しらべものをしようとして本棚に手をのばしたら、ウィリアム・ブレイクの一巻全集が落下してきて肩に当たったのだと言った。何にも知らないあのひとを、わたしはわたしの行いによって苦しめているのだろうか、という奇妙な疑問がふと頭を過ぎった。あのひとの知らないところで行われているわたしの不正が天災のかたちをとって、わたしにはなくあのひとに降りかかっているとしても？ それから「不正」が行われるたびごとに、やけどをしたり、肉を抉ったり、骨が砕けたりして、あのひとの軀は少しずつ^か闊けてゆく。けれどあのひとがわたしの身体に与える悦びはいよいよ深く、また夕日のような暗い輝きをいや増しに増してゆくのを止めることができない。あのひとが闊けてゆくにしたがって、こんなに恐ろしいまでにわたしはあのひとのことを愛していたのだという思いが大きくなる。あのひとが消尽したときにわたしの愛は完全になる。悦びも極点に達して、わたしもたぶん、死ぬ。誓約^{うけひ}により、わたしははじめてあのひとを落とすのだ。

木村和史

ブルーベリー

最初の見知らぬ訪問者は、初老の女性だった。わたしより年上なのは確実に思えるけれども、それほど離れていないかも知れない。

散歩がてら、小屋のわきに植えてある6本のブルーベリーの苗に惹かれて、立ち寄る気になったようだ。しかし、

「ブルーベリーを植えてるんですね」と話しかけてきた表情が、どことなく暗い。

「ブルーベリー、いいですよね」と呟いた声も、沈んでいる。思わずわたしは、

「いいですよねえ」と、やや大袈裟に明るい声をつくって同意した。この地に来てから、わたしは愛想がよくなっている。

「わたしもブルーベリーが好きで植えてるんですけど、うまく育たないんです。枯れてしまったのもあるし、年々小さくなっているような気がするんです」

思いつめたような、厳しい顔でわたしを見つめる。ブルーベリーの悩みというより、かたときも彼女を離れない、もっと深刻な人生の悩みを打ち明けようとしているみたいだ。体つきががっしりしていて、表情にも輪郭があつて、家庭に閉じこもっている人のようには見えない。

「どうしたら、うまくいくんでしょう」と尋ねられて、少し緊張する。この人に曖昧な言葉は通じない。生半可な答えでは満足しない。ストレートに訊いてくるのは、ストレートな

答えが欲しいからだ。そんなふうに感じる。とにかく、この人には言葉を選ぶ必要がある。だが、逆にいうと、余計な気をつかわなくてもよさそうだ。この地で、いい子にならねば、となぜか構えてしまうようになったわたしには、かえって好都合かも知れない。

6本のブルーベリーの苗は、東京でブルーベリー園をやっている知人がプレゼントして

くれたもので、育て方についていくつかのアドバイスをもたらしている。基本は、ピートモスをいっぱい鋤きこんで、土を酸性にすること。6割以上混ぜた方がいい、と指示されていた。

能書きの復唱みたいになるが、彼女にもそのような説明をしてあげた。

「ピートモスをたっぷり混ぜるといいですよ。根が浅く横に張るので、乾かないように根元もピートモスで覆ってやるといいですよ」

「日当たりも悪いのかな、と思うんですけど」

「そうかも知れません」

「やっぱり、寒さもよくないんでしょうね」

「そうかも知れません」
教えているのではなく、考えている。わたしも悩んでいるのである。

ここは泥炭地で、泥炭はピートモスそのもののことだから、本来ならなんの問題もないはず。むしろ、ブルーベリーにとつてこれ以上の適地はない。最高じゃないですか、と太鼓判を押して知人は苗を送ってくれたのだった。わたしも、鉢植えの苗をただ地面に下ろすだけで見事に育ってくれるものと思いついでいた。背丈ほどに育ったブルーベリーが、生垣のように敷地を囲む情景をたやすく想像することができた。しかし、現実とは違っていた。

6本の苗は、泥炭の地面に一度下ろしたものをまた鉢に戻し、今度は泥炭の地面ではなく、小屋のわきの日当たりのいい場所に穴を掘って移し植えたものだった。穴の中をほとんどピートモスだらけにして、ほんの少し堆肥も混ぜ込んだ。苗をしっかりとおさえ、水もたっぷり与えながら、様子を見ている最中のものだった。

送ってもらったばかりの苗を、勇んで敷地

の縁の泥炭土壤に植えたところ、一週間もた
たないうちに葉が赤く縮れて枯れそうになっ
てしまったからだ。

泥炭土壤を掘ると、白っぽくて固い粘土層
が現れる。泥炭らしきもののあいだにかなり
の厚さでそれが混じっている。電柱を立てる
穴を覗かせてもらったときに、想像していた
泥炭と違うことに気づいたが、理想的な泥炭
土壤のはずという思い込みを、頭から振り払
うことができなかった。

白っぽい粘土層をシャベルで無理やり崩し
て泥炭土と混ぜ込み、買って来たピートモス
も加えて、一本ずつ苗を植えていった。不安
はあるが、なんとかなってくれるだろう…。

「泥炭のお話し」という本に、水草が腐りき
れずに堆積して泥炭となって沼を埋め、火山
が爆発して泥炭の上に火山灰が降り積もり、
また沼ができて、腐りきれない水草が堆積し
て沼を埋め、また火山が爆発し、という繰り返
返しの歴史が書かれている。白い粘土状の層
はおそらくその火山灰なのだろう。火山灰が
酸性で（近所の人が教えてくれた）、泥炭も酸
性だとすると、ブルーベリーの生育には問題
がなさそうに思える。

苗が枯れそうになったのは、そのような土
壌の問題だけじゃなく、寒さや強風のせいも
あったと思う。5月下旬の北海道はまだまだ
寒い。毎朝、バケツに溜めた温泉水に手を浸
し（至福の時間）、温めてから作業にかかって
いたくらいだ。電気や水道の工事の人たちは
作業着だけで平気に見えたが、情けないこと
に、わたしには防寒着が必要だった。

苗にも当然、東京から北海道へという環境
の変化が影響したに違いない。勝手に連れて
こられて、さあ育てと命令されても、たやす
く笑顔をつくれるはずがない。そのように想
像する力がわたしにあつたら、苗も少しは楽
ができただろうに。

立ち話をしているあいだ、その女性が暗い
表情を崩すことはなかった。ただ、後で聞い
た話では、わたしが（というよりわたしの知
人が）アドバイスしたとおりに試みて、幾ら

か良好な結果が得られているようだ。

ブルーベリー談義をした日からしばらく経
つて、その女性よりひと回りほど年上の女性
と（またしても適当な見当のつけ方だが）話
をする機会があった。この土地が分譲された
ときにほぼ一番乗りで家を建てて住み着いて
いる人で、広い敷地にいろいろな種類の木や
植物を植えている。もちろん自分では手入れ
しきれないので、ときどき植木屋さんに入っ
てもらっているのだそうだ。

「ブルーベリーは難しいです。ハスカップは
放っておいても元気に育ってくれます」と彼
女は言う。

「枝を切って植えておくと、どんどん増えま
すよ」

聞いていて潔い感じがするのは、わたしが
まだ風通しのいい場所に立っていないからだ
ろう。先日の女性と同じように、ブルーベリ
ーに未練を残している。

ハスカップは北海道の一部で自生していて、
改良種もあるようだが、ほぼ野生種に近いと
いっていいだろう。ブルーベリーと比べると14
種類も味も劣るけれども、効能は何倍もある
ようだ。

もしもわたしが今ここで、分に応じた生き
方というものを真剣に考えようとしているの
なら、野性のハスカップで十分ではないか。
余計な苦勞をしてまでブルーベリーにこだわ
る必要があるだろうか。

夏になって、ホームセンターでハスカップ
の苗を二本（野生種ではないと思うが）買っ
てきた。ブルーベリーの苗と一緒に、畑に並
べて植える。畑は山の黒土を業者に運んでも
らったものだ。もちろん苗の周辺はピートモ
スだらけにする。まだまだ未練を残している
ブルーベリーと、自然体のハスカップ。ひと
冬を越して、今年、どうなっているか。わた
し自身もどうなるか。

山岸満

三瀬夏之介展「冬の夏」アートに出会う(3)

二月十九日

わたしにとって初めて知るヒトだ。まずこの個展にかぎる印象から。

筆致はいい。とりわけ線がいいとおもう。いわゆる日本画の線ではない、揺れていると喻えられる線が画面を構成している。たぶんここに行き着くまでにはかなりの描きこみと試行錯誤があったんだろうな、というのが率直に頭に浮かんだことである。素人目にみても、岩彩と墨をつかうことにより画面構成を自在にこなしているとみた。一見稚拙にみえるかもしれないところもあるが、それも仔細にみると三瀬の意図した手によるものであるとわかる。そしてそれは、濃淡と滲みにより空間造型をはたしているというところに三瀬の視線と指先の角逐があったのだとおもう。というのは、このところに三瀬の世界が集約されているからである。此処で実現されたものは「ねじれ」ということに集約される。この「ねじれ」で何が表されているのか。まず視線の力学からいえば、三瀬は幼児の視線をベースに空間を構成し、そこで空間位相の異なったものを同置させる。この文法（画法）は日本画にのっとったものだ。空間の表現、いわゆる遠近の処理は絵画においてまず潜り抜けなければならぬ大問題であったということである。三瀬は確信犯としてこのことを越境しようとしているんだろうな。日本画の約束事としての画法をつかっているがモチベーションはまったく違う。このことは誰の眼にもあきらかだ。三瀬のめには日本画も伝統という枠組みと無縁なその他の様々な表現様式のひとつに過ぎないということはあきらかだ。かれにとつて日本画とはまず「ねじれ」をプレイクスルーできる技法として選び取ら

れていると思う。今回の個展は二つの階にわたりドローイング、インスタレーション、オブジェ、カラージュ等で構成されているが散漫な印象はない。一言で集約するなら大きな風呂敷を拡げているようにみえるけれど、じつは収縮しようという視線の軌跡なのだ。さきにそれを幼児の視線といったが、至近なものに注ぐ視線をそのままそこから広がって行く環界に注ぐ視線の移行を同一の地平に展開しようとしている。たとえば画面のサイズとは無関係にあえて微細なものをそのまま細かく描きこんでゆく。それはちょうど子供があたえられた画面のサイズを無視して自らの興味のおもむくままに至近のサイズで描き連ねてゆくことを想定すればよくわかる。近づいて視れば岩窟の集落とそこに拡がる集落の細々とした情景だけれども、画面のサイズに応じた距離で視ればその微細なものたちは色彩のうねりと構成にのみこまれてしまう。そこを横断するように線が画面を漂う。たぶん、三瀬のこの線とは至近な視線と無限遠方に退いた視線をともに横断する橋なのだ。

ここでこの展でひとつ違和とかんじたことを述べなければかたておちだ。それは作品に書き込まれた鉛筆のコトバである。これははつきりだめだといえる。あたかもメッセージのように書かれたものは所謂スピリチュアルな世界にたいするシンパシーや、エコロジカルな極ありきたりなものである。もし、このようなことを三瀬の描くせかいのネタだとしてたらわたしたちは白けるしかない。なぜ彼はコトバではなく絵画を描こうとするのか。

わたしたちのかんがえでは絵画つまり描くという表現は文字による表現よりはるかに歴

史的に古いといえよう。むしろヒトにとって
絵の描線はコトバ（文字）の線と重なること
はいうまでもない。つまり象徴化ということ
なのだ。絵画はこのことからコトバと同期
して成立したことは疑い得ない。コトバはそ
の後の時間のつみかさねのなかで、展開し高
度化していったとかんがえられる。しかし、
絵画（絵）はたぶん原初の光景をそのままた
もっていったとおもえる。三瀬はこのコトバ
にたいしては本来の意味としてナイーヴだ。
ここでわたしがかれの作品からうけたものは
かれが想っている、あるいは思い込んでいる
こととはかけ離れている。収縮する視線を展
開することによりじつはひとつでしかない個
々の視線に展開される世界の密かな広さとい
うものを、ある距離の深度によってしめして
いることをたしかな力場としてめのまえにあ
らわしたのだ。

三瀬夏之介展・佐藤美術館

悪人正機説について 3

(承前)

親鸞の悪人正機説は、少なくともここまでの流域面積を持つているものと理解されなくてはならない。ここにおける済度とは、許しという意味合いよりは、むしろ悪を造り罪を犯したものが自ら慙愧し誓願をおこなう、といった参加型の撥無と委ねを通じて、損なわれた世界の修復を図ることではあるまいか。そしてそこに寄り添う大悲のその巨大さは、悪のその深さに鋭敏に即応しているはずだ。悪にむかう大悲は世界のあらゆる部分に浸透し、それは無礙にしてなにもその浸透をさまたげることとはできない。なぜならそれは空の空なるものであるからだ。気をつけなくてはならないのは空とは存在の無ではないということだ。事情は以下に引く文章のごとくである。

ものが空であるということは、そのものが本体として存在するのではなくて、原因や他のものに依って生じてきているということである。一般には空ということばは、無ということばと通じるから、空はものが存在しないという意味に取られやすい。しかしことばが誤解されるのはことば自体が本体をもたないからである。われわれがいう空性とは本体のない存在ということであって、存在の無ではない。空性という表現も、たとえば、車輪や車軸や車体の集まりをかりに車というように、仮の名づけにすぎない。車という実体があると思ひこむのが誤りであるように、空という本体があると考へてはいけない。また車ということばでかりに呼ばれるものがないのでないように、空であるといわれるものは存在しない、というわけでもない。そのようにもの

の本体の存在、その滅としての非存在のいずれをも越えるものであつて、それはシヤカムニ・ブツダの説いた中道のほんとうの意味である。(『空の論理〈中観〉』梶山雄一・文、角川ソフィア文庫「仏教の思想」3、146〜147頁より)

この論理によれば悪や罪業は消滅したのではなく、存在するでもない。まさに教行信証がいうところ、「非有非無」のさししめすものとおりののである。罪業有らざるにあらざ。だがその悪人は大悲に摂取され往生を遂げる。慙愧し誓願するものは、喩えて言えば地獄に墮ちることをまぬかれる。では慙愧せず、誓願も拒むもの、すなわちその存在があるだけで正法が誹謗されていることを意味するような、そんな人間の罪業はどうなのか。教行信証の教えるところでは、たしかにそのものは「ある種の地獄」には墮ちるが、最悪の地獄に墮ちるのではない。一は仏や聖衆を見ることを得ず、二には正法を聴くことを得ず、三にはさまざまな供養をおこなうことができない境域に置かれようけれど、それは無間地獄よりはましであろうと。教行信証に引く善導の言葉によれば、五逆と誹謗正法の罪はあまりに怖ろしい。それを憐れんだ弥陀のはからいは次のごとくである。

四十八願のなかのごとき謗法五逆をのぞくは、しかるにこの二業そのさはり深重なり。衆生もしつくればたゞちに阿鼻にいりて歴劫周章していづべきによしなし。たゞし如来それこのふたつの過をつくらんをおそれて、方便してとゞめて往生をえずとのたまへり。またこれ撰せざるにはあらざるなり。(『教行信証』

岩波文庫版237頁)

言葉のままに。

それでも往生は遂げられる、と言っているのである。いや、撰取せざるにはあらざる、と、言っている。すなわち非有非無の空の論理はここでもつらぬかれている。救済なきこと、というわけでも、必ずしもないのであるよ、と。もし大悲があるとしたら、そこまで撰取する、そのままで、そのまったく救いのないところまでくまなく降りてゆく。これを一転させれば、ほとんどまず第一にそこから撰取する、最悪最重のところからまず第一に手をつける、という截面に接触しているとは言えまいか。「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」は、この文脈から見ると大変飲み込みやすい。悪人正機の真の意義はここで生きる。

このとき悪人が往生を遂げられるのは、悪人が主体ではなく客体であるかぎりにおいてである。悪人が自ら救われようと、あるいは救いを拒否しようと、主体的に何かを意志し意図することによって彼は往生は絶対におとずれない、また反対に彼は往生を回避し得ない、というのが親鸞の思想の独歩たるところだろう。彼は自身としてはなにも造らない、世界と自分にはなにも付け加えない、という客体化された素材であるような自己であるかぎりにおいて、彼に初めて往生がおとずれると言える。誓願や慙愧、ないし懺悔といった一見主体的に見える行為も、なにかしら圧倒的にやって来るものの促しに対する投地のようなもので、自らあらかじめはかって、意志しておこなうこととは少し違うような気がする。迷悟一如と言うが、ありのままの我がそのままで済度される、とよく説かれる真宗の教義が、ここに位置していることがようやく理解される。

さて、ここまでながながと書いてきて、得たものの貧しさは自分でも分かっているのだが、この論の最初に提起した問題は、以下をもつて結びとしたい。ここで殺人犯人あるいは死刑囚には、すでに大悲が届いているものとする。「いはんや悪人においてをや」という

理論的に言えば、慙愧のない、少なくとも被害者遺族から見て慙愧の感じられない殺人犯人に対して、被害者遺族は、裁判所の下す判決より常に一等以上重い量刑を望むものであり、それは極刑が最終的に担保する体系の中で望まれる。このとき極刑は量刑の中の一重ものというよりは、刑の体系全体をある仕方では、罰の志向性がそこで極められる、つまり死に至る志向性を持つものになる、ということにかかわる。被害者遺族が常に殺人犯人に対して、その死を望むというわけではないと思う。ただ、遺族感情としては、事案に際して死という事態と無関係でいるということとは不可能であろう。慙愧のない殺人犯人に対して被害者遺族が望む死は、質的なもので、あるいは志向的なもので、量的なものに換算できないと考えられる。許せないと思う感情からは、極刑以外の量刑に対しては畢竟して極刑にまで至る心の志向を覚えるだろうが、では実際殺人犯人が極刑に処せられたらどうなのか。懲役五年、十年、二十年、無期と量刑を数えていって、これは実際の一人の懲役囚の心身にとつてはフィジカルに重くなってゆく「量」と言える。では、その先の刑がもたらす死は死刑囚にとつて「量」と言えるのか。極刑が下された瞬間から彼に「量」は存在しなくなる。彼がフィジカルに存在しなくなるということとは、彼はすなわちその瞬間から誰にとつてもフィジカルな人格ではなくなるといふことだ。殺しても飽き足りないやつ、という言い方があるが、フィジカルな人格ではなくなった相手を、いくら想像の中で、たとえば千遍万遍殺そうが、親鸞の時代のように一族の血を絶やすまで係累のものを皆殺しにしようが、飽き足りることはないだろう。また現実にもそういったことは法的に許されない、というよりは、業縁によって為し得ないものである。この稿の始めあたりで触れた、歎異抄における親鸞の「ひとを千人ころして

んや」という問いかけの答えがここにある。理論的には、一回殺した相手はそれ以上殺すことができない。犯された犯罪がいくら大きくても、償うべき身は一人分の貧しい肉体でしかないのだ。死刑は少なくとも死刑囚本人にとつて、量刑の中の最高刑であるとともに、量刑を離れた位置にあると思う。

悪人正機の構造は、善人と悪人と、そしてそれ以外の第三の存在をも浮かび上がらせる。すなわちそれが被害者遺族である。いま、千遍万遍殺そうがとか、一族の血を絶やそうがとか、恐ろしいことを書いてしまったけれど、犯罪遺族の感情のある部分はこのような光景で占められているものと思量する。目には目、歯には歯ということで、殺された子どもや恋人やきょうだいと同じ思い、同じ苦しみを味わわせたいと考えるのが、大方の持つ感情なのではないだろうか。ことに慙愧のなさと見られる殺人犯人に対しては。このとき犯罪遺族の心の中もひとつの地獄となつて彼ら自身を燃^もしているものと推量される。たとえ殺人犯人が死刑になつても、ならなくても。だがよくよく思いみるに、たといはならない極重の罪を犯した人間であるにせよ、ごく一般の常識を持った善良な社会人が、ひとの死をひたすら庶幾する、という光景——こんなにもおびただしく庶幾するという光景は、やはり異様と言わざるを得ない。異様であり、なによりひとの死を希う側のただならぬ不幸と無惨を思う。だが、「個人」としてはこの趨勢にあらがうのは非常にむづかしいことなのかもしれぬ、とも考える。だがしかし、ともう一度思う。冒頭に述べたこの、ああ、自分は救われないなという、深い心の痛ましさへの気づきから（そういう瞬間とはどこかでかならず出会っている）、一切空ということのゆたかさに捨身する——悪人正機とはそういうことではなかったのか。この現代社会において、トリアージとしての仏の大悲は、善人からも悪人からも遠く追放された彼らのような存在にこそまず第一にさきだつて、届けられるべきだと思う。すべてはしどけなくも

一如不二^{ふた}であり、こうべをめぐらせば、そのことはいつでも突然届けられてしまうものだから。

（おわり）

*テキストの教行信証と歎異抄は岩波文庫版を使った。そのほか、角川ソフィア文庫『空の論理』（梶山雄一執筆部分）、『タブーと結婚——源氏物語と阿闍世王コンプレックス論』のほうへ』（藤井貞和著、2007年、笠間書院）を参照した。また、ネットでは「浄土真宗やつとかめ通信」、「親鸞仏教（渡海難）」の2サイトも参照し、お世話になつた。教行信証の教義に関しては、私はかなり強引な解釈をしたと自覚している。

confidence

昔の映画では人々が大いに煙草を吸っているが、彼らが火を貸し借りする場面が私は好きだ。それもマッチの火でなく、煙草を吸っている人からその吸いさしを借りて、まだ火のついていない自分の煙草に火を移す姿が特に好きだ。澁澤龍彦「欠乏の時代」(『狐のだんぶくろ』所収)にあるように、「こっちのたばこが目に見えて短くなるほど、すばすばと強く吸」う「なかなか凶々しいやつ」もいたようだが、それでも「たばこの火を貸すのを断わるものはずいなかった。おっかないやくざみたいな男でも、こっちが頼めば、いつでも気持ちよく貸してくれたものであった」そうだ。マッチの自由販売は昭和二十三年とある。

(後藤)

ネットで盛んに本を買い込んでいるが、どう考えてもそのうちの半分以下しか読めない程度の読書時間しかない。そのうち時間ができたら読めばよいではないか、と言われるかもしれないが、そんな日は来ないような気もする。それを考えると、非常にむなしいことをしているような気がするが、欲しいと思った本を手に入れたときは、やはりうれいのだ。かくして本人から見ても矛盾したことをいつまでも続けるのだろうか。(長尾)

昨年後半、アメリカに発したクラッシュの津波は全世界を襲っている。むろんわが国もその波に大きく洗われることとなった。わたしたちがこの事態に対してとる姿勢は限られているとおもう。ひたすら身を

ちいさくし、足もとを固めるようにして耐えてゆくしかない。と同時に、百年に一度と言われているこの事態の推移を、現場に居あわせる当事者として見、識る機会がわたしたちに与えられているとおもう。(山岸)

五月三日の憲法記念日の夜。テレビ番組だが、憲法二十五条の「生存権」を絡ませながら、現在の「貧困」の問題をとらえるものを見た。経済評論家の内橋克人と「派遣村」の村長などをした湯浅誠、この二人の対談を軸とした番組だった。湯浅誠の「社会」に対する考え方、今の日本の社会は「人間をつぶしてゆく社会」だと彼は言う。自分は評論家ではなく、その「社会」を変えてゆく活動家(アクティビスト)として生きていると彼は言明する。「生存権」を「権利」として主張できる社会を作ってゆきたい、隠蔽され続け、あげくのはてに個人の「罪」として認識させられてきた「貧困」が、社会の歴史的なひずみの積み重ねに原因をもつものであるということを明らかにすること、この社会を国家や政治権力に対してきちんともものが言える社会に変えてゆきたいという。こういう考え方は今にはじまったものではないが、なぜか新鮮な思いで耳を傾けた番組だった。(水島)

父が認知症と診断されてまる二年たった。わたしはその三か月前から専門の先生に診てもらおうと説得していた。そのまた三か月前に父は家を通り過ぎて南に向かつてどこまでも歩いていった。だからわたしは

おかしいな? と感じて二年半たったことになる。二年前の介護日記には毎日ていねいに父の様子が書き込まれている。しかし今月のページには一行しか書いていない。驚くことが少なくなっただけかわたしがい加減なせい、日々はたんと過ぎていく。飛ぶように過ぎていく。いつか本当に飛び立つ日まで。(福島)

時事ネタもどうかと思ったがある言葉を紹介する。「僕は一皿のスパゲティみたいなものだ。何百本もの手が頭上から伸びてきて、むしり取られる感じだ」あるブログで知ったが、あるとき音楽評論家の湯川れい子氏がマイケルジャクソンから直接聞いた言葉だという。

僕はマーヴィンゲイやステイービーワンダー、スライ&ザファミリーストーン、アースウィンド&ファイアなど黒人のシンガーやグループを時々聞きたくなる。家族で子供のとき出かけるとき、父の運転する車のラジオでそれらを聞いたような思い出がある。日曜や土曜の昼下がり。素敵だったのだが奇妙に閉塞した思いもあった。それは家族が悪いというよりも、自己決定が難しい状態を生きたときに感じる普遍的な不自由感だろうか。それは富のあるなしと異なり、またリンクして、根源的に「奪われている」感覚だろう。搾取というか……

マイケルは得たものも大きい、自分自身の生を「むしり」取られ奪われることの実感さらには巨大だったのか。作品制作に身を削るということは芸術家にはある。しかしマイケルの言葉は私にとり我々や世界に広がる困難、不安定、根こそぎ感を極端な形で想起させるものだった。(石川)

今、職場で、僕の机はコピー機の真ん前

にあります。仕事はありません。何もしなくともよい(らしい)のです。あと9年勤めて51歳になったら、25年公務員を勤めあげたことになり、年金がもらえます。そこで、僕は51歳になったら職場を早期退職し、63歳で年金が貰えるようになるまで、退職金をうまく使って、オリエンタル・シヨートヘアという希少種の猫のブリーダーになろうと思っています。もちろん、詩を書き続けながら……。皆さんご存知だと思いますが、シャーロック・ホームズは、その晩年を、養蜂家として静かに過ごしたのでした。(野村)

先日、昔の芝居仲間の友人の一人と久しぶりに居酒屋で飲み、その席で約三十年前の「エチュード」と呼ばれる稽古をした時の話題になりました。それは舞台上で座長からアドリブで色々なことを語り掛けられ、対する役者は決して感情を頭わにすることなくそれに応じなければならぬ、という一種の人格コントロールとも言えるような稽古だったので、当時の劇団の座長が何とかして私を怒らせようとしたものの、私がそれこそ絶対に動じずに怒らなかったことがとても印象的だったと言われました。そして最後には、意地になったその座長の靴を「舐めろ」と言われてそれを笑って舐め、舞台の雑巾掛け用に汲んであったバケツの汚水をその場で「被れ」と言われて平然とそれを頭から被ってしまった、他の役者が見守る舞台上に一瞬かなり気まずい空気が流れたことを昨日のこのように覚えていきます。そういう変な意味での負けず嫌いが私のベースにあるようです。(秋川)

五月の半ば、台所の窓に掛かるヒメシヤ

ラの枝にメジロが巢をかけた。台風並みの暴風雨に二夜まで耐えて、六月の頭に孵化。若いメジロの夫婦が交代で毛虫を運んでくる。毎朝ブラインドをあげて様子を見るのが心の支えであった。

東フィルの券が当たって、黛敏郎の曼荼羅交響曲を上野の文化会館で聴いた翌朝、ブラインドをあげて一瞬声を失った。ひとめでカラスの仕業と知れた：

毛虫を啜えた若いメジロの夫婦は、もう来ない。

Vajra-dhatu mandalaは、金剛界曼荼羅
Garbha-dhatu mandala は、胎藏界曼荼羅
(和田)

一日に一遍、日課である散歩をしていると、犬を連れて同じように散歩している老若男女と頻繁にすれちがう。よく観察してみると、犬とそのご主人様の顔がしばしば非常に似通っていることに気づく。顔つきのことではなく、顔そのものがだ。柴犬みtainな顔のご老人や、シーズーと見分けのつかない顔をしたおばさんなど、私の確信はますます深まる。ところで、夫婦も十年も一緒にいると、お互い顔が似通ってくるとか。この場合、どちらが飼い犬で、どちらが飼い主なのであろうか。(倉田)